



帰国子女は文化的アイデンティティをどう体験しているのか : 2つの事例を対話的自己論の視点から検討する

黒羽, カテリーナ

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7(1):15-24

(Issue Date)

2013-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81005357>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005357>



帰国子女は文化的アイデンティティをどう体験しているのか

－ 2つの事例を対話的自己論の視点から検討する －

How Do Returnees Experience the Cultural Identities -A Case Study from the Viewpoint of Dialogical Self Theory-

黒 羽 カテリーナ *

Kateryna KUROHA*

要約：2つ以上の異なる文化を経験しながら成長する青少年が増え、彼らのアイデンティティ形成の特徴に注目が集まっている。しかし、ある文化への所属感覚や意識としての文化的アイデンティティが内包する葛藤を中心的なテーマとして取り上げている研究は少ない（Murphy-Shigematsu, 2004；関口, 2003）。又、文化的アイデンティティが受動かつ静的な概念であることを前提とした研究が目立つ。本研究では自己の世界において複数の、ときには対抗的にもなりうる「私」（I-position）の存在を認め、そうした I-position の間に起こりうる対話を力動的にとらえる対話的自己論（Hermans&Kempen, 1993）に基づいて帰国子女の文化的アイデンティティを検討することを試みた。文化的アイデンティティを自己の世界におけるひとつの「文化的ポジション」として変換し、自己対面法（Self-confrontation method）を用いることで、①当事者がどのように複数の「文化的ポジション」を体験しているのか、②ポジション間にどのような対話的關係があるのかを動的に捉えていくことを目指した。異文化接触の体験は類似していても、文化的アイデンティティの意味づけや、ポジション間の対話的關係が異なる2つの事例を取り上げて検討する。

1. 文化的アイデンティティとは

文化的アイデンティティとは、自分がある文化に所属しているという感覚（文化的帰属感）、あるいは意識（文化的帰属意識）である（鈴木, 2008）。そもそもアイデンティティは、自我同一性、社会的な同一性、実存的な同一性、生物学的な同一性と、いくつかの意味合いで使い分けられており、文化的アイデンティティはこの中の社会的アイデンティティの範囲に入るものとされている（原, 1995）。

近年、人の国際的移動の増加とともに2つあるいはそれ以上の異なる文化を経験しながら成長する青少年が増え、文化的アイデンティティは教育学や人類学、社会学や心理学などの様々な分野から注目を浴びている。特に、日本では異文化接触を前提とした研究が多く、帰国子女（藤生, 2005；箕浦, 1994）、国際児（鈴木, 2008）、中国帰国者（永井, 2006；趙, 2007）、在日外国人（関口, 2003）を研究対象としている。一方で、文化的アイデンティティの捉え方は、どのように文化とアイデンティティを捉えるかという問題と直接的に関連しているため、研究分野によってその定義や研究方法は一貫していない。

本論文では、文化的アイデンティティに関する先行研究の問題

点や、現在注目されている点に着目しながら、対話的自己論の視点から捉えることを試みる。

2. 先行研究の諸問題と対話的自己論

長い間文化的アイデンティティは静的な概念として捉えられてきた。一度形成されると生涯変わることがなく（箕浦, 1994）、また、異文化接触の過程の中で良い・悪い、弱い・強い影響を「受ける」ものであるといった位置づけがなされてきた（一二三, 2008）。しかし、こうした捉え方は帰国子女や在日外国人のケースでよく見られるような、文化的アイデンティティの揺らぎを体験したり、一般的に文化的アイデンティティと呼ばれるようなアイデンティティを持たない状態に至ったりすることを不適応あるいは病的な現象として理解しやすい（Phinney, Cantu & Kutz, 1997）。あるいは、研究者のスタンスや方法論的に、協力者に対して暗黙のうちに「どちらですか」と所属・帰属感の選択を迫ってしまう場合が少なくないと思われる。

一方、福嶋（2003, 2005）によると、文化的アイデンティティをそのように二項対立的に捉えることは協力者を「中国帰国者」などのステレオタイプにカテゴライズし、彼らが「根無し草」的

* 神戸大学大学院人間発達研究学研究科博士課程後期課程

（2013年4月1日 受付）
（2013年7月24日 受理）

な存在であることを決め付けてしまう危険性を含んでいる。協力者の多様性を無視せず、揺らぎの体験をありのままに描き出すためには、文化的アイデンティティを多元的な構造を持ったものとして捉える必要が生じる(鈴木, 2008)。福嶋(2003, 2005)は基本的な視点として、多層的で複雑な構造を持つ文化と個人との間に存在するダイナミックな相互関係に重点を置くことを強調している。

これに対して対話的自己論は、文化的アイデンティティを自己の世界において、また自己の外側にある文化や内在化された文化との関係の中でひとつの過程、動的な概念として捉える可能性を与えてくれると思われる。対話的自己論(Hermans & Kempen, 1993)によると、個人の自己の世界にはいくつもの「私」(I-position, 以下ポジションと記)が存在している(例えば、「母親である私」「野球が好きな私」「引っ込み思案な私」など)。そして、一個人の自己においては相反するポジションの存在も可能である(「オープンな私」と「人見知りな私」など)。つまり、文化的アイデンティティやその周辺にある「私」をポジションに置き換えて捉える場合、「日本人としての私」「中国人としての私」などがいくつも存在しうる状態を可能にするのである。多文化カウンセリングや継続的なインタビューを研究法としている調査では、「〇〇人としての私」だけではなく、二文化の混合アイデンティティ(マーフィ重松, 1994)や第三の文化的アイデンティティ(堂本, 1987)、さらには、「自由人」「ノーアイデンティティ」など脱文化的な所属感(李・田中, 2010)も報告されている。数多くの、そして様々な特徴を持ったポジションの可能性を主張している対話的自己論の視点から見た場合、今までのステレオタイプを逸脱した文化的アイデンティティも描写することができるだろう。また、ポジションは内面の感覚やイメージ、役割や価値観だけではなく、「私の車」や「通っている学校」など、外の世界にあるものもポジションとしても存在可能である。そのため、文化的アイデンティティを対話的自己論から捉える場合、「文化的ポジション」、その他の「私」、さらにもともとは外界にあったが、何らかの意味を与えられ内在された事柄との関係も捉えることができるのである。受け身だけではなく、周りの環境や内面の事象との関係を動的に捉える可能性を与えてくれるのである。

3. 文化的アイデンティティの動的な関係性を捉える

文化的アイデンティティ、特に多文化カウンセリングに着目した研究では、文化的アイデンティティをその個人の全人格として捉えることに対する批判的な主張が注目を浴びている(原, 1995)。文化的アイデンティティが拡散やモラトリアムの状態であっても、職業や宗教など他のアイデンティティが自己において中心的な位置を占めるなどして、全体的なアイデンティティの拡散や社会における不適応をもたらさない例もあることから、文化的アイデンティティの揺らぎを病的なものとして強調しないこと、及び、他のアイデンティティとの関わりや全体的・総合的なアイデンティティにおける位置づけを考える必要性が主張されている(大西, 2002; 原, 1995)。特に、多文化カウンセリングにおいては、当事者の多様性、今・ここにおける個人の発達課題、当事者とコミュニティなどの社会との関係に注目し、個人の不適応を当事者の心

理や文化的アイデンティティの問題にのみ還元しないこと、文化的アイデンティティが常に流動的でその形成は生涯続く過程であることが主張されている(井上, 2004; 栗原, 2004; Murphy-Shigematsu, 2004)。

個人と文化の流動的な相互関係を前提とした動的な文化の概念(福嶋, 2003)と、多元的・重層的構成要素からなり常に変化している「可能態」プロセスとしての動的なアイデンティティの概念(藤生, 2005; 関口, 2003)に基づいた捉え方は、常に揺らぎ一生変化し続けるもの、選択するものとしての動的な文化的アイデンティティの概念と結びつく。そして、それは状況に応じてもっとも適応的である文化的アイデンティティを選択するという戦略のみならず(李・佐野, 2010)、文化・社会・個人間で生じる様々な事象や要因を個人自身が選び内在化するという意味での選択(大西, 2002)をも意味する。つまり、多様な文脈を持ったひとりの個人は今・この瞬間の中で彼にとって中心的で重要な事象並びにアイデンティティを選択し、壮大で流動的な意味体系をダイナミックに構築し続けているのである。

これらの主張を受けて、対話的自己論の重要な概念として、本論文ではポジション間の対話的關係(dialogical relationships)と支配性(dominance)に着目したい。Hermans & Kempen(1993)によると、ポジションは自己の世界においていくつも存在するだけではなく、人間社会に特徴的な葛藤(conflict)や批判(criticism)、協力(agreements)などの関係を持つことができるのである(Hermans & Hermans-Konopka, 2010)。ポジションはまるでひとつの人格としてそれぞれの“声”(voice)を持ち、互いに対話的な関係に入ったり、あるいは沈黙を保つことができるのである。こうした考え方は、文化的アイデンティティ間、文化的アイデンティティとその他のアイデンティティや、内在化された外界や内面の様々な事柄との関係を描くことを可能とする。さらに、こうした対話的關係は今・ここに於いて常に変化し続けているという対話的自己論の視点を取り入れることで、複数のアイデンティティ間の力動を捉えることを試みることができる。

また、ポジションは支配性を持っており、それは今・ここに於いて弱くなったり、強くなったりする。ある場面において支配的であるポジションでも、場面が変われば以前の様に優位でなくなることがありうるのだ。アイデンティティをポジションとして置き換え、それらの対話的關係や支配性の変化を見ていくことで、文化的アイデンティティを選択する状況や、生涯において中心的なアイデンティティの移り変わりを描写することができると思われる。

4. 本論文の目的

上記のことを踏まえ、本論文では文化的アイデンティティを「文化的ポジション」として置き換え、それらが内在化された外界や内面のどのような事柄とつながっているのか(結合しているのか)(溝上, 2001)、つまり、これらのうちどのような事柄がある文化的アイデンティティにとって特に重要なのかを捉えることを目的とする。また、その他のアイデンティティもポジションとして置き換え、こうしたポジション間の支配性の変化や対話的關係を見ていくことで、当事者がどのように文化的アイデンティティを体

験しているのかを捉えることを目的とする。

5. 方法

1) 研究協力者について

近畿県内に住む、成人になるまでに海外滞在の経験をした20代の大人5名を面接協力者とした。そのうち本論文では滞在国、滞在年齢及び期間など、もっとも近い体験をしている2名（女性）の事例を取り上げ、くわしく検討する（表1）。

表1 協力者のプロフィール

事例	性別	滞在国	渡航年齢・滞在期間・ * 渡航理由
A	女性	英国	13～18歳の4年間半 * ホームステイ留学
B	女性	英国	12～16歳の4年間 * 父の仕事

2) データ収集の方法

Hermans & Kempen (1993) の自己対面法 (Selfconfrontation method) を参考に、半構造化面接を協力者1名につき3回実施した。協力者には研究を目的とした面接調査であること、ICレコーダーで録音をすること、プライバシーは守られ、いつでも録音を中止あるいは録音したものを消去できる旨を伝えた。

自己対面法では、自己の異なる、時には相反するポジションを対面させながら語りを進めていく。本研究では、日本の文化的アイデンティティと英国の文化的アイデンティティをそれぞれ「日本の文化的ポジション」と「英国の文化的ポジション」として置き換え、面接の中で対面させた。そして、今・ここで関与しているその他の文化的アイデンティティを「その他の文化的ポジション」、その他のアイデンティティを「その他のポジション」として置き換え（図1）、それらとの関係も含めて、協力者が感じるそれぞれの重み付けや、関係性について伺った。具体的な質問内容は以下の通りである。

- ①具体的なエピソードを中心に、「日本の文化的ポジション」、並びに「英国の文化的ポジション」のそれぞれに関する過去・現在・未来における重要な意味単位について。例えば、「英国的な私をイメージしたときに、あなたにとってもっとも大事だと感じられること、あるいは一番イメージしやすいことは

何ですか」という質問に対して、協力者が「ズバズバいいすぎだよと言われるとき」と答えた場合、それを意味単位のひとつとして捉え、具体的なエピソードなどを伺った。

- ②同様に、「その他の文化的ポジション」について。

- ③同様に、「文化的ポジション」を対面させたときに、思い浮かぶ「その他のポジション」について。

- ④協力者によるそれぞれのポジションのネーミング。

- ⑤今・ここにおけるそれぞれの「文化的ポジション」の重み付け、及び具体的なエピソードを中心に「文化的ポジション」の現在・過去・未来、および一日の間における力関係やポジション間のやりとりの有無や特徴について。

第1回目の面接では、滞在理由や期間などに関する基本的な情報と上記の1から3までの項目について、第2回目の面接では第1回目の面接内容を筆者がまとめたものを読み上げ、そのまとめを聞いた協力者の感想、4の項目について、第3回目の面接では今までの面接の内容を筆者がまとめたものを読み上げ、それへの協力者の感想を伺った。なお、第2回目、第3回目の面接で聞き取った感想も分析対象のデータとして扱った。

面接では、対話的自己論の考え方について「ダイエットをしたい私とお菓子を食いたい私を同時に持つ人」の例を使って、①複数の、時には相反するポジション（「私」）が存在してもいいこと、②それらはなんらかの対話をするこも、何も発言しないこも可能であることの2点を説明し理解を確認した。説明を用いた理由は、①長期に渡って異文化接触を果たしたケースではどちらか一方の文化的アイデンティティを選択しなければいけない経験や、なんらかの文化的アイデンティティを主張することに対して批判される経験が多いため（Murphy-Shigematsu, 2004）、そうした所属感がいくつあってもいい、どういう風に体験されていてもいいというメッセージを伝えることでより自由な語りを促進したかったこと、②自己対面法を実施する上でこの2点の理解があるとよりスムーズであると思われたからである。

「日本の文化的ポジション」を「日本的な私」、「英国の文化的ポジション」を「英国的な私」、「その他の文化的ポジション」を「両方を含む、あるいはどちらでもない所属感を持った私」、「その他のポジション」を「文化のおよび異文化接触に関連するの所属感に関係ないと感じられる私」として協力者に伝えた。それぞれのポジションの重要な意味単位について具体的なエピソードを中心に質問していくことを重視した。「文化的ポジション」のイメージやそれらの間にある関係性を協力者がどのように体験しているのか筆者が把握し、協力者とイメージや説明を共有しやすいようにアルバムと色鉛筆を補助的な手段として用いた。いつでもすぐに使えるような状態で準備し、「説明やイメージされるときに必要なであればお使いください。絵、図、文章でも何でもかまいません」と教示した。できるだけ生きた声を捉えるために、協力者の体験や意味づけを「日本的な私」「英国的な私」というタイプにはめ込むのではなく、感じ方や捉え方を整理するための手段というスタンスで面接を進め、対話的自己論に対する協力者の考え方や違和感なども受け止め、大切に扱った。面接中の使用言語に関しては、現地の言語を自由に使ってもいいと伝えたが、筆者からの質問などは全て日本語で行った。

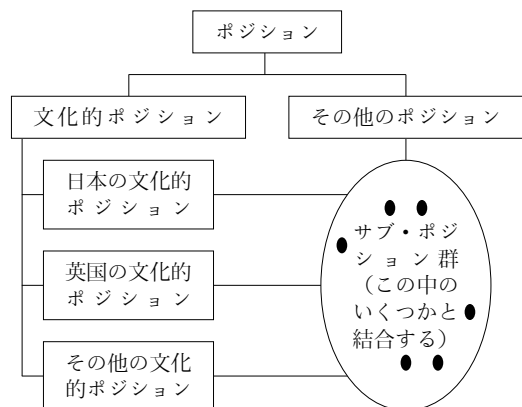


図1 本論文で扱ったポジションの種類と関係

3) 分析方法

得られたインタビューのデータは以下の方法で分析した。

- ①「文化的ポジション」の支配性と結合の変化が観察されたもっとも単純なエピソードまたはもっとも単純なエピソード群を抽出し、変化の特徴、きっかけ、過程を分析した。ここでいうもっとも単純なエピソードとは、文章レベルのものであり、「サブ・ポジション」として扱った (Hermans & Kempen, 1993)。例えば、「日本語で話しているときは、日本的な私を強く感じる」などがそうであり、この場合「日本的な私」は「日本の文化的ポジション」, 「日本語で話している私」は「サブ・ポジション」として、さらにそれらは「結合している」という理解をもとに、データ分析の過程で扱った。また、複数の文章が集まって初めて意味を成す場合は、それらをエピソード群として扱った。
 - ②逐語録を再度読み返し、それぞれのポジションの支配性と結合の過程と変化に焦点をあて、一日の間、並びに過去・現在・未来における関係性の変化の特徴、きっかけ、過程を分析し、分析方法①の結果と照合した。
 - ③「その他の文化的ポジション」「その他のポジション」に関わるもっとも単純なエピソードを抽出し、その特徴及び、②で扱った関係性の変化のエピソードの中でそれらがどの様な役割を果たしているのかに注目した。
- なお、ポジションは全て「」で示している。

6. 結果1「文化的ポジション」と「サブ・ポジション」の結合

分析の結果、協力者の語りにおいて「文化的ポジション」と結合する「サブ・ポジション」は①言語、②思考・認知傾向、③感情傾向、④行動傾向、⑤記憶、⑥志向性、⑦他者の視点、⑧価値観の評価の категорияに分類された。カテゴリーの例を表2に示す。

以下は、志向性のカテゴリーのサブ・ポジションと文化的ポジションの結合の例である (表3)。なお、直接引用している協力者の言葉は斜体で示している。

表3 志向性「サブ・ポジション」との結合の例

文 化 的 ポ ジ ゾ ン	サブ・ポジション
	日本の文化に興味のない私, 娯楽に興味のある私

<事例A>「日本人らしい私」はそこまで、なんだろう、「日本が

表2「文化的ポジション」と結合する「サブ・ポジション」のカテゴリーと例

カテゴリー名	語りにおける「サブ・ポジション」の例
言語	英語／日本語を話す私、日本語で考える私、声が大きい私、ジェスチャーが増える私、枕言葉が多い私
思考・認知傾向	論理的な私、視点が広い私、捉え方がプラスな私
感情傾向	感情表現がダイレクトな私、自由を感じる私、愛国心を持った私
行動傾向	忍耐力のある私、お喋り／あまり喋らない私、時間にルーズな私、上司をたてる私、議論する／しない私、すぐ謝る私、謙虚な／謙虚さがない私、料理に合わせて野菜等の切り方を変える私
記憶	音の記憶、体の感覚の記憶
志向性	外国人と関わりを持ちたい私、違う国で働いてみたい私、サブカルチャーに興味のある私、食事は目で見て楽しみたい私
価値観や習慣の評価	日本的な上下関係に腹が立つ私、英国の教育がためになったと感じる私、日本人のファッションに違和感がある私
他者の視点	日本的な物を求められる私、変だと思われている私

好きな私」と比べて、日本の文化とかに興味がないので。どちらかというと、娯楽らしい説明のときは「日本人らしい私」が出てくるんですけど。

《特徴》事例Aにおいて「日本の文化的ポジション」の意味づけの1つとして、日本の文化には興味がないということが挙げられる。「文化的ポジション」と結合する興味に関するポジションはその文化に関することへの興味・関心であるとは限らないことが分かる (表3)。

また、以下は他者の視点と行動傾向のカテゴリーの2つの「サブポジション」が「文化的ポジション」と結合して初めて意味を成す例である。

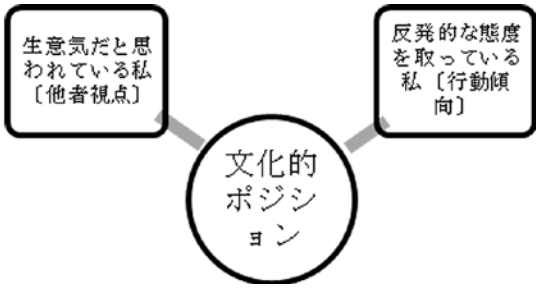


図2 2つの「サブ・ポジション」との結合の例

<事例B> (日本で人間関係の基本として求められていることを) あえてしないで・・・いたりとか・・・反発的な態度をとってたりとか・・・してるときは。周りからはどう見られているのか分かんない。生意気だと思われてる気がするんですけど。

《特徴》この例では、「英国の文化的ポジション」の重要な意味単位として、「生意気だと思われている私」という他者の視点を意味する「サブ・ポジション」と「反発的な態度を取っている私」という行動傾向を意味する「サブ・ポジション」があげられ、結合を成している。どちらか一方でも結合は可能だが、2つのサブ・ポジションとの結合を示すことで、より豊かに体験を描写できる (図2)。

7. 結果2 文化的ポジションの対話的關係

分析の結果、支配性の変化に焦点を当てた「文化的ポジション」間の関係性は5つに分類された (表4)。なお、○は変化が見られた事例、*は変化が見られなかった事例を示している。

表4 「文化的ポジション」間の関係性の種類

関係性の種類	定義	事例	
		A	B
優位な支配性	いずれかのポジションが圧倒的に支配的な場合	○	○
スイッチング	あるポジションの支配性が低くなり、他のポジションが優位に支配的になる場合	○	○
葛藤	いずれのポジションの支配性も同程度だが、ポジション間で葛藤が生じる場合	○	○
共存	いずれのポジションの支配性も同程度だが、葛藤は生じず共存的な関係にある場合	*	○
同盟	いずれのポジションの支配性も同程度だが、何らかの課題や目標を達成するために協力関係にある場合	○	*

以下にいくつかの例を紹介する。「日本の文化的ポジション」を●、「英国の文化的ポジション」を■、「その他の文化的ポジション」を▲、「サブ・ポジション」を▼で示す。結合しているポジションは一で、その時点で結合していないポジションは――で繋いで示す。

1) 同盟

＜事例＞外国人のお客さんを連れてまわってるときは3つともフルに活用してる。日本的なものを説明してるときは、説明してる内容はこっち（日本の文化的ポジション）だけど、しゃべってるのはこっち（英国の文化的ポジション）じゃないですか。両方の文化を比べている私は「その他の文化的ポジション」で。3つがブレンドされてる感じがします。

《特徴》本事例では、「●日本的なものを説明している私」として意味づけられている「日本の文化的ポジション」、「■英語で話している私」として意味づけられている「英国の文化的ポジション」並びに「▲両方の文化を比較している私」として意味づけられている「その他の文化的ポジション」という3つの「文化的ポジション」が協力し合っている体験が語られている。その際、海外から来客に日本を案内するという活動が3つのポジションの共通目的となっている。同盟という関係性は、それぞれのポジションの目標が一致したり、役割を相補えるような活動が可能ときに生じていた。

2) 支配性のスイッチング

＜事例A＞例えば、意見が食い違ったときに、英国人だったら、「英国的な私」（英国の文化的ポジション）がその食い違いについて議論すると思うんですよ。お互いの納得がいくまで。自分の言いたい意見を言うし、相手の意見も聞いて。結果、あいだを取ると思うんですけど。相手が日本人だと、いろいろ言うてくる人だとしても私はあんまり言い返したりなくて。“そうだね”って相槌を打つ感じ。

《特徴》事例Aでは、相手（日本人から英国人に、または英国人から日本人に）が変わることに応じて「文化的ポジション」の支配性がスイッチングしている。その結果、「文化的ポジション」の結合が「■議論しない私」から「●議論する私」へと変化している。このように、スイッチングは状況や場面の変化に応じて、より適切なあるいは協力者にとって居心地のいいポジションに支配

の優位性をゆだねる必要があるときに生じる（図3）。そのため、事例Aの「●議論する私」「■議論しない私」のような行動傾向、特に交流ストラテジーに関わる「サブ・ポジション」によって意味づけられている「文化的ポジション」のスイッチングがもっとも多かった。また、物事の捉え方を変える必要性が感じられたときに、思考・認知や感情傾向に関わる「サブ・ポジション」との結合が変化し、「文化的ポジション」のスイッチングが生じる例も見られた。

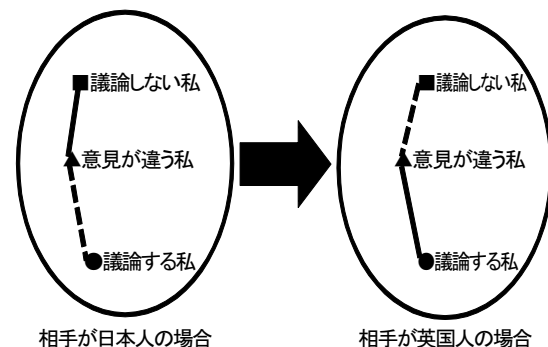


図3 事例Aに見る結合の変化と支配性のスイッチング

3) 「文化的ポジション」間の葛藤ののち、「文化的ポジション」同士が共存するとき

＜事例B＞（「英国の文化的ポジション」について）先輩に対して同じ扱いをしたがるというか。そういう場面のときはもう本当に腹が立つんですよ、私。先輩とか後輩と言う関係が（笑）。（「日本の文化的ポジション」について）けど気を遣うときもある。例えば、仕事で上下関係変だんと思いつつも、やっぱりそういうのを気にする人がいるっていうのは分かってるから、下は下らしくした方がいいのかなとか（笑）。矛盾してるなどか思うんですけど。

《特徴》日本的な人間関係を求められる環境において、事例Bは「■日本の上下関係に腹が立つ私」によって意味づけられている「英国の文化的ポジション」と「●気にする人がいるから下は下らしくした方がいいのかなと思う私」によって意味づけられている「日本の文化的ポジション」が葛藤状態にある。葛藤後、事例Bは行動の上では「●下は下らしく振舞う私」によって意味づけられている「日本の文化的ポジション」を意識的に選択し支配性を保っている。しかし、「■日本の上下関係に腹立つ私」によって意味づけられている「英国の文化的ポジション」は自己の世界において支配的であり続けており、考えや感情に影響を与えている。2つの「文化的ポジション」は共存関係にあるのだ。こうした共存関係は、同盟と異なり、葛藤に失敗した“開き直り”や“我慢”として体験されていることが多く、一方の「文化的ポジション」の存在や、「文化的ポジション」間の葛藤を体験することに不安あるいは不満を引き起こしていた。また、本研究では紹介していないが、共存を“消極的な同盟”として肯定的に位置付けていた協力者もいた。

8. ポジション・システムとしての事例検討

本研究で提示する事例Aおよび事例Bでは、「文化的ポジション」を意味づける（結合する）「サブ・ポジション」、そしてポジ

ション間の対話的關係にそれぞれ特徴的な傾向が見られた。ポジションは自己の世界においてあたかもひとつのシステムとして、それぞれの事例に特有の法則に従って結合したり、対話的關係に入ったりしていた。以下に、ポジション・システムとしての傾向に焦点をあてながら、事例A及び事例Bの、①語られたポジションと協力者によるネーミング、②ポジションの結合の特徴、③対話的關係の特徴について検討する。

1) 事例Aーコミュニケーション・ストラテジーとしての文化的アイデンティティ

1. 語られたポジションと協力者によるネーミング

面接の中で事例Aは3つの「文化的ポジション」と、2つの「その他のポジション」について語った(表5)。

表5 事例Aが語ったポジションとそのネーミング

種類	ポジション名	特徴
日本の文化的ポジション	日本人らしい私	日本で生活する上で欠かせないあるいは適応的な行動傾向や習慣の知識など。場面によって支配性がスイッチングしやすい。
英国の文化的ポジション	英国の私	英国で生活する上で欠かせないあるいは適応的な行動傾向や習慣の知識など。場面によって支配性がスイッチングしやすい。
その他の文化的ポジション	日本が好きな私(「英国な私」に付随)	日本の伝統に興味をもち、日本文化が批判されると腹が立って反論したくなる。日本への愛国心。
その他のポジション	日本人だけど、日本人らしくない私	自分の本性や一番強い欲求。自身の軸であり、ひとりでは支配性が強い。社会では文化的ポジションに優位をゆずるが、消えることはなく「裏側に潜んでいる(Aの言葉)」, 本当の気持ちや考えなど
	私じゃない私	自分とは別のところにいる、自分を客観的に見てくれる

2. 結合の特徴

全体的な特徴のひとつとして、事例Aの「文化的ポジション」は行動傾向カテゴリーの「サブ・ポジション」ともっとも多く結合していた。例えば、「日本人らしい私」は「議論しない私」「すぐに謝る私」「遅刻しないようにがんばる私」であった。また、「英国の私」は、「議論する私」「堂々としている私」などであった。特に、対人関係における交流ストラテジーである「サブ・ポジション」による意味づけが多かった。また、言語や感情カテゴリーの「サブ・ポジション」との結合は行動傾向カテゴリーの「サブ・ポジション」との結合があって初めてその意味づけがいきにくることがほとんどであった。例えば、行動傾向と言語のカテゴリーの結合パターンでは次のようなことが語られていた。

＜事例A＞日本で日本語でディベートするときは、私本当にしゃべらないんですけど。英語でディベートするときは先生にもびっくりされるぐらい。そんなにしゃべってたの？って言われるぐらい、しゃべっちゃう人なので。

《特徴》「しゃべらない私」(行動傾向)によって意味づけられている「日本の文化的ポジション」、あるいは「よくしゃべる私」(行動傾向)によって意味づけられている「英国の文化的ポジション」のどちらかが支配的になるかかどうかは、「日本語で話す私」(言語)と「英語で話す私」(言語)のどちらと今・ここでの結合が選択されるかに左右されていた。別の言い方をすると、英語を話す状況では「英国の文化的ポジション」の支配性が優位になるが、それと同時に「よくしゃべる私」という意味づけがいくてくる。そして、日本語を話す状況では、「日本の文化的ポジション」が優位になり、「日本の文化的ポジション」を意味づけている「しゃべらない私」も支配的になるのである。このように、事例Aでは状況が変化するにつれて「文化的ポジション」の支配性が変化しており、それは行動側面を中心に生じていた。

一方、自分自身の空間だと感じる家にいるときは、「文化的ポジション」ではなく、「日本人だけど、日本人らしくない私」という「その他のポジション」がもっとも支配的であった。このポジションは、「日本とか英国とか関係ない本来の私?私の軸のような存在」として語られており、「文化的ポジション」とは対照的に欲求や志向性、感情カテゴリーの「サブ・ポジション」によって意味づけ(結合)られていた。さらに、「私じゃない私」は思考・認知傾向や記憶カテゴリーの「サブ・ポジション」によって意味づけられており、メタな視点の役割を果たしていた。

また、「英国の私」に付随する「文化的ポジション」として「日本が好きな私」が語られていた。このポジションの一番の特徴は、「英国の文化的ポジション」に付随しているにも関わらず、日本への愛国心や、日本の伝統・歴史への興味関心として意味づけられていることだった。これについて事例Aは、「英国に行くことがなかったら、「日本が好きな私」は生まれてこなかったと思う。向こうではみんな愛国心というか。自分の国のことをよく知っていて。そこから私も日本の習慣とか、歴史とか?に興味を持つようになって。」と語っていた。

まとめると、欲求や感情傾向などをつかさどり自己の核の役割を果たす「日本人だけど、日本人らしくない私」に対して、「文化的ポジション」はそれぞれの社会に適応していくためのストラテジーの役割を果たしていた。加えて、「日本が好きな私」は日本への愛国心、「私じゃない私」はメタな視点として意味づけられていた。

3. ポジション・システムと関係性の特徴

事例Aはスイッチングがもっとも多かった事例である。国、相手の国籍、話題、言語が変化するに連れて「文化的ポジション」の支配性を適応的にスイッチングしていた。また、自分自身の空間だと感じる家にいるときは、「文化的ポジション」から「日本人だけど、日本人らしくない私」という「その他のポジション」にスイッチングをしていた。それぞれのポジションの役割と、関係性について事例Aは次のように語っていた。

＜事例A＞「日本人だけど、日本人らしくない私」が私の中で、なんだろう、一番ゼロの部分というか。本質的な部分だから、これ(人間の絵)が私として、これ(人間の絵)を素っ裸にした状態が、「日本人だけど、日本人らしくない私」。で、私が着ているこの服?身体を二分化するとして、その上半身の部分が「英国の

私」で、もう半分が「日本人らしい私」。で、上半身の「英国人の私」の中に「日本が好きな私」(めがね)もいて。で、ぜんぜん違う、幽霊みたいな存在に「私じゃない私」が。なんだろう、別の存在としている。というつもりで書きました(笑)。

「日本の文化的ポジション」と「英国の文化的ポジション」と「その他のポジション」が場面・状況の変化に応じてスイッチングしており、「私じゃない私」というもう一つの「その他のポジション」は常に一定の支配性を保ちながら、自身の軸である「日本人だけど、日本人らしくない私」とポジション間の対話の関係に参加していた。葛藤が生じることがあっても、「私じゃない私」という「その他のポジション」がポジション間の関係を客観的に見たり、思考・感情・行動において方向性を与えたりすることで、それ以外の3つのポジションのうちいずれかに支配性がスイッチングしていたのだ。

4. 事例の考察—スイッチングに重点をおいた傾向

事例Aはスイッチング型のポジション・システムを形成していた。「その他のポジション」のひとつ、「日本人だけど、日本人らしくない私」が軸となり、もうひとつの「その他のポジション」である「私じゃない私」が自己の世界における状況を客観的に見る役割を担っていた。そして、それぞれの「文化的ポジション」が主に行動傾向の「サブ・ポジション」と結合することによって、場面や状況の変化に応じて臨機応変に、そして適応的にスイッチングしていた。

事例Aは自己の世界において「英国の文化的ポジション」と「日本の文化的ポジション」という両方の文化に対応できる自己概念を創り上げていると思われる。「文化的ポジション」に主に文化的認識と社会的行動技法の意味づけを与え、状況に応じてそれらを切り替えているのだ。これは、バイカルチュラリズムにおけるスイッチング・メカニズム(江淵, 2002; Garcia, 1982)に相当するもので、葛藤の有無にかかわらず、事例Aは支配性をスイッチングすることにより非常に適応的に文脈に対応していた。

また、メタな視点を持った「私じゃない私」の役割に注目したい。Hermans & Kempen (1993)は、自己の世界においていくつも存在し、相対的に自立しているポジションがばらばらにならないためには、視点を提供することでそれらを総合していく役割を果たしている第三のポジション(Self)の重要性について述べている。第三のポジションは特別な性質を持っており、全体としての自己の世界を達成するために、他のポジションを並列させたり相互関連させたりすることができる総括する役割を果たしている。事例Aにおける「私じゃない私」はまさにこの第三のポジションのニュアンスを持っていると言えるだろう。

2) 事例B—行動や価値感において中心的な役割を果たしている日本の文化的アイデンティティと、他者視点の役割を果たしている英国の文化的アイデンティティ—

1. 語られたポジションと協力者によるネーミング

面接の中で事例Bは2つの「文化的ポジション」と、1つの「その他のポジション」について語った(表6)。

表6 事例Bのポジションとそのネーミング

種類	ポジション名	特徴
日本の文化的ポジション	日本人な私	自己の世界において軸として中心的な役割を果たしている
英国の文化的ポジション	ジャパニーズ英国人	日本の文化や習慣に対して反論したい私、他人が気づかないことに気づける私
その他のポジション	相対的に自分を見る私	常に変化している自分の本質的な部分で、相対的に自分を評価している

2. 結合の特徴

事例Bの「文化的ポジション」は、思考・認知傾向、行動傾向、記憶、他者視点カテゴリーの「サブ・ポジション」によって意味づけられていた。特に、「比較する私」という「サブ・ポジション」との結合が圧倒的で、何かをしったりあるいは感じたりする上で、日本と英国の文化的な要素や、それぞれの国での体験を想起しては比較することが多かった。

さらに詳しくみていくと、「英国の文化的ポジション」は「もう一度英国に行って英国での体験の意味を確認したい私」や「海外で暮らしたい私」などの志向性カテゴリーの「サブ・ポジション」と数多く結合していた。また、特徴的なこととして、「英国の文化的ポジション」は「視点が広い私」であると同時に「変だと思われる私」として意味づけられており、「日本の人間関係に腹を立てる私」や「日本の教育が嫌いな私」など、日本的なものへの違和感や否定感と結合していたことがあげられる。「英国の文化的ポジション」は異文化接触をしたがゆえに物事に対して異なる視点を与えてくれるものであり、それは特に日本文化への否定的な感情や、日本の社会における孤立感を感じさせるものでもあるのだ。

これに対して、「日本の文化的ポジション」は「日本語を話す私」といった言語カテゴリー、「上司をたてる私」「謙虚な私」といった人間関係や、「料理によって野菜などの切り方を変える私」「ハンカチを毎日持ち歩きたい私」といった習慣に関する行動傾向カテゴリーなど、日常生活の大半を支えるような「サブ・ポジション」によって意味づけられていた。

さらに、「相対的に自分を見る私」である「その他の文化的ポジション」は「相対的にしか周囲を見れない私」「相対的にしか自分を見れない私」と物事を絶対的な基準で見れないことへの否定感によって意味づけられている。特徴的なのは、面接の初期では「英国での経験のせいで帰国後日本でうまくいかなかった私」という過去の異文化接触を否定的に評価する意味づけのみを含んでいたことに対して、面接終了後には「英国での体験を捉え直したい私」という体験の再位置づけを試みる内的過程として意味づけられていたことである。

3. ポジション・システムと関係性の特徴

事例Bでは、ポジション間の同盟という関係性が一切なく、また事例Aにとって特徴的であったスイッチングも非常に稀であった。その一方で、事例Aでは見られなかった共存という関係性ももっとも多く観察された。外的・内的状況が変化した場合、事例Aではスムーズな支配性の交代(つまりスイッチング)が見られ

ていたが、事例Bでは葛藤の有無にかかわらずほとんどの場合において共存的な関係性が成立していたのだ。特に、「7. 結果1 文化的ポジションの対話的關係」で記述したように、「日本の文化的ポジション」は外界における実際の行動として、「英国の文化的ポジション」は内面における思いや感情、価値観として共存していたのである。

こうした対話的關係の在り方には、それぞれのポジションの意味づけと、ポジション・システムにおける位置づけと関連していた。

事例Bは「その他のポジション」を土台、「日本の文化的ポジション」を軸に、時折「英国の文化的ポジション」やその他のポジションが優位な支配性を持つというポジション・システムを語った。写真1は事例Bがポジション間の現在の力関係を示すために描いたものである。土が「その他のポジション」、緑が「日本の文化的ポジション」、水が「英国の文化的ポジション」、葉っぱや花はさまざまな経験に関連する「サブ・ポジション」である。

＜事例B＞この水が「英国の私」。たぶん、自分にとってはなんらかの影響を与えて、この水があるから成長しているんだろうけど。でもなんだろう、この水、必要なものなんだろうけど、なんかも。うーん。どれくらいの量かわからない感じ。そんな感じ(写真1)。



写真1 事例Bが描いた現在のポジション・システムの力関係

事例Bの日常では基本的に「日本の文化的ポジション」がもっとも高い支配性を持っている。しかし、時折、「英国の文化的ポジション」が文化の比較や新しい視点、日本的なものに対する違和感（価値観や習慣の評価カテゴリー）、さらには志向性という意味づけのもとで水として降りかかってくる。しかし、この「英国の文化的ポジション」が今の自身にとってどれくらい必要なものかどうか事例Bは評価しきれないと感じているようだった。日本で経験する人間関係に対して違和感を持っても、「英国であったように対等に見てくれる人と出会いたい」という欲求を抱いても、それらは全て内面に追いやられ、具体的な行動や発言として外界に表出されることは稀である。事例Bにとって、「日本の文化的ポジション」が中心にあることは“当たり前”に感じられることであるのだ。一方で、内面と実際の行動を支配している「文化的ポジ

ション」が異なるという状態は、時に自身の特別性として、また時に不愉快な感覚や寂しさとして体験されている。

4. 事例の考察—軸と他視点としての文化的アイデンティティ

事例Bにおいて、それぞれの「文化的ポジション」はポジション・システムにおいて明確な役割を果たしていることが伺える。「日本の文化的ポジション」はひとつの基本的な軸として、「英国の文化的ポジション」は他視点を与えるものとして体験されていた。

先行研究において、異文化接触を体験した者は苦悩することで文化的アイデンティティが生じ（江淵，2002）、その変容は一生続くプロセスであると述べられている。事例Bの今のポジション・システムがあるのは、体験された異文化の体験をどのようにして位置づけるのかという苦悩と連続したものであると考えられる。「日本の文化的ポジション」を自己の中核として位置付けているにも関わらず、その土台が相対性を本質とする体験であることからこのような考察が導き出せられると思われる。筆者との面接を通して事例Bは再び、異文化経験の意味を確認したいと語るようになった。面接の中で「英国の文化的ポジション」について語り、「英国の文化的ポジション」と「日本の文化的ポジション」を対面させることによって、「英国の文化的ポジション」の支配性が強まり、このポジションが与える日本での日常への違和感や寂しが増したと考えられる。Hermans & Kempen (1993) は、自己対面法の過程の中ではそれまでのポジションの支配性が大きく変化することがしばしば見られると述べている。事例Bでは、「英国の文化的ポジション」が「日本の文化的ポジション」よりも支配的になったわけではない。しかし、より強さを増すことによって、「相対的にしか自分を見れない私」という土台的なポジションが「英国での体験を捉え直したい私」という新たな意味づけを持つという大きな変化が体験されていたのである。

10. 総合考察

1) 文化的アイデンティティは帰国子女によってどのように意味づけられているのか

語りの分析の結果、「文化的ポジション」は言語や感情傾向、志向性や行動傾向など様々な「サブ・ポジション」と結合していた。つまり、帰国子女にとって文化的アイデンティティはことば、食べ物や服の好み、積極的あるいは消極的、遅刻しやすいあるいは遅刻しにくいといった行動傾向や、これからどんなことをしたいかという将来への展望、家族や友人といった重要な他者など様々な事象で意味づけられていると示唆できる。これらの事象の全ては、帰国子女に限らず国際児や中国帰国者などに関する先行研究において文化的アイデンティティを形成する要因として挙げられているものである（永井，2006；鈴木，2008など）。

事例Aにとって文化的アイデンティティはその文化と関わる上で欠かせないあるいは適応的な行動傾向や知識として意味づけられていた。対して、事例Bにとってのそれは一方が自身の軸で、片方は志向や異なる視点、時には違和感を与えてくれるものであった。ほぼ同年齢で、同じ英国という文化と接触していても、文化的アイデンティティをどのように意味づけるかは個人によって異なっていたのだ。文化的ポジションがどのような「サブ・ポジシ

ン」と結合しているかを見ることは、その個人にとって今・ここで文化的アイデンティティがどのような意味のネットワークとして体験されているのか理解する手助けになる。事例Aのように、外界と接触する上で浮上してくる意味づけなのか。または、事例Bのように、日常生活の基本的な要因によって意味づけられたり、そうした日常に対する違和感や他視点として意味づけられたりするの。さらに、本研究の事例では見られなかったが、個人の発達課題を担ったり、重要な他者との関係を中心に意味づけられたり、適性や職業などの知的・能力的要因、容姿や健康などの身体的要因など様々な意味を与えられることが考えられる。こうした意味づけの特徴は異文化接触の際に体験した事柄や、協力者のもとの性格・気質・パーソナリティ傾向と関係している可能性が示唆され、一般的な傾向や特徴を検討する必要性があると思われる。

また、溝上（2001）によると、こうした意味構築の過程は常に変化し続けている。今後の課題として、不適応に繋がるような意味づけをされた文化的アイデンティティの体験をより肯定的な過程にするためにはどうしたらいいのか、さらにはどういう意味づけが不適応を起こしやすいのかという問いへの答えが求められるだろう。

2) 文化的アイデンティティはどのように体験されているのか

Hermans & Hermans - Konopka (2010) は、葛藤 (conflict) や同盟 (agreement) など、人間社会に存在する様々な対話的關係がポジション間でも存在すると主張している。本研究では、そうした対話的關係の一部が結果として得られた。また、共存という対話的關係は箕浦（1994）が述べているような、行動面ではある文化に対して適応的でも、感情や考えはその文化の様式と同化しきれていないという状態にとっても似ていることが伺える。箕浦（1994）はそうした状態に対して不適応を招きかねないものとして批判的に捉えている。一方で、それぞれのカテゴリーの「サブ・ポジション」と結合した「文化的ポジション」とその間にある対話的關係を見ていくと、そうした共存状態は必ずしも不適応とは限らず、むしろそのポジション・システムにおいて均衡を保とうとしている結果だとうかがえることが度々ある。文化的アイデンティティがどのような内在化された外界あるいは内面の事象で意味づけられているのか、そして文化的アイデンティティ間の、またはその他のアイデンティティとの間でどのような対話的關係が繰り広げられており、それらが総合的にどのようなポジション・システムをなしているのかを見ていくことは、個人の体験をステレオタイプ化せず、動的な過程として生き生きと捉えることを可能にする。そして、それは個人の不適応あるいは適応を、異文化の影響が弱かったのか・強かったのか、ネガティブなものだったのか・ポジティブなものだったのかという枠組みではなく、より総合的に、様々な関係性の中で見ていくことを可能にすると思われる。

3) 今後の課題

本研究では、文化的アイデンティティの体験過程を捉えるために対話的自己論を採用し、自己対面法を用いて「英国の文化的ポジション」と「日本の文化的ポジション」を対面させた。「〇国の文化的ポジション」という刺激を協力者に与えるということは、

「国＝文化」や「国民性」といった静的でステレオタイプ的な視点の暗黙の提供を免れていないと思われる。一方、結果を見ていくと、類似の体験を持った2つの事例では、それぞれ異なるポジション・システムが体験され、「文化的ポジション」の意味づけや「その他の文化的ポジション」の特殊性も独自の特徴を持っていた。また、事例Aの「英国の私」という予め協力者に呈示してはいない「文化的ポジション」が語られていた。自己対面法は、協力者に対して高い洞察力を求める方法であるが、同時にそれは文化的アイデンティティが暗黙に含んでいる「ステレオタイプ対独自性」といった相反性の中で、協力者自らが独自の体験を模索し、あるいはそうしたステレオタイプを乗り越える手段として機能する可能性が示唆される。今後の課題としては、協力者の体験をステレオタイプの影響を最小限にとどめありのままに描き出す方法を追求し続けると同時に、そうした相反性が協力者にとって持つ意味を吟味することだと思われる。

本研究では英国の帰国子女に焦点を当てているが、文化的アイデンティティの体験は、異文化接触の過程や渡航先の文化の特色などによりある種の制約があることを忘れてはならない。今後の課題のひとつとして、文化的アイデンティティの体験過程の一般性を導き出すことが考えられるが、その手段のひとつとして英国の帰国子女に限らず、多様な協力者の語りを吟味することが必要だと思われる。

対話的自己論のポジション、対話的關係、支配性といった概念を用いることは、2つの事例の独自の意味づけやポジション・システムの体験を生き生き描き出すことを手助けしてくれる手段であると思われる。また、文化的アイデンティティを適応・不適応という閉ざされた枠組みを超えて、生きるということの豊かさや独自性と深く結びついた体験として位置付ける可能性を与えてくれるものであると考えられる。今後の課題としては、ポジション・システムが描き出す文化的アイデンティティの可能性を多文化カウンセリングとの実績と照合させ、臨床的な研究との連携を進めていくことが重要であると考えられる。

引用文献

- 堂本暁子（1987）. 国際人より世界人—これからはじまる海外子女の時代. 海外子女教育, 168, 16-18.
- 江淵一公（2002）. バイカルチュラリズムの研究. 九州大学出版.
- 藤生始子（2005）. バイリンガル児童の文化的アイデンティティ—親の文化的態度との関わり. 福岡女学院大学紀要, 15, 83-119.
- 福嶋智（2003）. 「外国人児童生徒」教育におけるアイデンティティに関する一考察—中国帰国児童生徒教育と「在日朝鮮人」教育から. 九州大学大学院教育学コース院生論文集, 3, 161-173.
- 福嶋智（2005）. 異文化間教育におけるアイデンティティ研究の位置づけ—「自己過程サイクル論」試論. 人文研究：神奈川大学誌, 156, 63-77.
- Garcia, R. L. (1982). *Teaching in pluralistic society: Concepts, models, strategies*. New-York: Harper & Row.
- 原 裕視（1995）. 異文化接触とアイデンティティ—問題提起にかえて. 異文化間教育, 9, 4-18.
- Hermans, H. J. M., & Kempen, H. J. G. (1993). *The dia-*

- logical self*. Academic Pr. 溝上真一・水間玲子・森岡正芳 (訳) (2006). 対話的自己—デカルト／ジェームズ／ミードを越えて. 新曜社.
- Hermans, H. J. M., & Hermans-Konopka, A. (2010). *Dialogical self theory-positioning and counter-positioning in globalizing society* -. Cambridge University Press.
- 一二三朋子 (2008). 日本人学生と中国人学生の文化的アイデンティティと国際感覚に関する一考察. 文学言語研究, **54**, 93-106.
- 井上孝代 (2004). これからの社会に求められる異文化カウンセリング—「マクロ・カウンセリング」の視点から. 異文化間教育, **20**, 40-55.
- 栗原真弓 (2004). 異文化間カウンセリングを実施するうえでの留意点—帰国児童生徒への臨床を通して. 異文化間教育, **20**, 11-19.
- 箕浦康子 (1994). 異文化で育つ子供たちの文化的アイデンティティ (国際時代の教育—グローバル・エデュケーション「特集」). 教育学研究, **61**, 213-221.
- 溝上慎一 (編) (2001). 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学. ナカニシヤ出版.
- マーフィ重松, S. (1994). マルチエスニック人と日本社会. 横田雅弘・堀江学 (編). 現代のエスプリ, **322**, 177-185.
- Murphy-Shigematsu, S. (2004). *Multicultural encounters: case narratives from a counseling practise*. University of Tokyo Press.
- 永井智香子 (2006). 中国帰国者の子弟のアイデンティティ形成に関する追跡調査—思春期に中国からやってきた子供たちの来日10年目と18年目の面接の記録. 長崎大学留学生センター紀要, **14**, 63-73.
- 大西昌子 (2002). 異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー—文化的アイデンティティ研究を中心に. 東京大学大学院教育学研究科紀要, **41**, 301-310.
- Phinney, J. S., Cantu, C. L. & Kutz, D. A. (1997). Ethnic and american identity as predictors of self-esteem among african american, latino, and white adolescents. *Journal of youth and Adolescence*, **26**, 165-185
- 李原翔・佐野秀樹 (2010). 中国帰国者三星の文化的アイデンティティの形成について. 東京学芸大学紀要, **61**, 185-193.
- 李正姫・田中共子 (2010). 在日コリアン二世・三世の二文化環境への態度とメンタルヘルス—文化的アイデンティティの自己認識に関する面接調査. 岡山大学大学院社会文化科学研究紀要, **30**, 177-196.
- 関口知子 (2003). 在日日系ブラジル人の子供たち—異文化間に育つ子供のアイデンティティ形成. 明石書店.
- 鈴木一代 (2008). 海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成. プレーン出版.
- 趙 衛国 (2007). 中国出身高校生の異文化適応過程—文化的アイデンティティ形成の要因に注目して. 東京大学大学院教育学研究科紀要, **47**, 337-346.